「税金」という名のヒーロー

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校３年　　奈良　実月

二〇二一年六月二十一日、私の祖母は天国へと旅立った。祖母は四十六年前から膠原病という病気の一種である全身性エリテマトーデスという国から指定されている、難病を患い続けていた。だから、私がいつも祖母に会うときは病院で、ベッドに横たわっている姿であった。祖母の病気は自分自身の体を、免疫系が攻撃するようになり、全身にさまざまな炎症を引き起こしてしまう病気であり、私は祖母の口から「苦しい。」という言葉を聞いたことはなかったが、祖母の体はやせ細っていて、様子を見ていると心苦しかった。

そんな難病を患っていた祖母を「税金」は様々な形で助けてくれたと母は言っていた。その一つが「難病医療助成制度」であった。この制度は指定難病の患者の経済的な負担を軽くするために、病院での外来や入院時の診察費・治療費、薬局での調剤費や訪問看護の費用など様々な医療費の一部を助成してくれるというものであった。祖母は、普通に日常生活を送ることができる期間もあったが、度々入院をしていたので、この制度は本当に祖母を支えてくれたものだったそうだ。膠原病を患っている人の中には重症の人もいて、外に働きに行くことができず、日常生活を送ることが困難な人もたくさんいる。そんな人達にとっては、この制度はより大切で重要な制度であると思う。

私達中学生にとって税金というのは、何だかよく分からない、難しいものであるが、商品を買ったりするときに、何気なく税金を支払っている。案外、税金は私達の生活の近くに潜んでいるのだ。そして、私達が生活していく上で忘れてはいけないのは、税金は誰かの命を救うヒーローにもなっているということだ。日本には、膠原病以外にもたくさんの難病によって、毎日とても辛く、苦しい日々を送っている人々がいる。その人達の日常生活を支えて、助けているのは、税金による補助制度だ。だから、若い世代でも、税に対する知識をしっかりと身につけて、税を払うことの意義を再確認することがこれからとても大切になってくると思う。私の祖母は闘病を続けていたが、亡くなってしまった。そのことは私に深く大きな悲しみを与えたが、私は祖母の為にも、難病と闘っている人々を少しでも救い出せるように前を向いて、税金に対する考えをもっと深めていきたいと思う。祖母もきっと自分と同じような境遇に立っている人を一人でも多く支援してほしいという思いを持っていると思う。

私達が毎日色々な場面で、支払っている税金、それは病気と闘っている人々を救う「希望」であり、ヒーローだ。そして、税金を支払っている私達一人一人もきっと誰かのヒーローになっている。この世界がそんな素晴らしいヒーローであふれるように一歩ずつ前を向いて、進んでいきたい。